

The Gallery voice

NO-34

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2008.5.27
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

＝香港アートフェアより＝ 「中国のアートバブル」

田原美野

先日、香港アートフェア（5/14～18）をみる機会を得た。アジアを中心とした世界各地の画廊100軒あまりが出店し、その画廊一押しの作家や作品を展示販売するイベントである。会場は近年の中国現代アートブームを象徴するように、多くの美術ファンでにぎわっていた。旧知の中国人ギャラリーオーナーのブースを訪ねてみた。「ビジネスはうまくいってる？」と訊くと「アーティストたちの小間使いみたいなものさ！」と冗談まじりでこたえ、中国人アーティストたちの懐具合のよさを皮肉っていた。ここ数年、中国のアートビジネスは大きく様変わりした。私は8年前2年間ほど上海に留学で滞在していたが、当時はまだ現代アートを扱う画廊は数えるほどしかなかった。前述の画廊オーナーも展示会を企画開催するものの、なかなか売れないとよく嘆いていた。しかしその後、香港と北京に新画廊をオープンさせ、成功した画廊の一つになっている。

今夏のオリンピックと2010年の上海万博をひかえ、経済成長まっ只中にある中国は、まさに過去80年代の日本のバブル期の様相である。経済とアートマーケットは歩みを同じくするといわれるが、アート業界にもそれはそのまま当てはまる。経済力をつけた中国人企業家や投資家に加え、お隣韓国の投資家が美術市場を盛り上げているという。アートをアートとして楽しむコレクターがいる一方で、作品を投資の対象として買いあさる投資家も存在する。アートビジネスは常にその二面性をもっている。絶好のビジネスチャンスといわんばかりに、期待の若手新人作家を紹介する中国の画廊が数多くみられた。

中国現代アートは中国国内の政治、社会状

況に強く影響を受けてきた。特に1989年の六四天安門事件は、ある意味でターニングポイントとなり、90年代はポリティカル・ポップアート、シニカル・リアリズム、チャイナ・キッシュなどの表現過程をたどってきた。現在の中国アートバブルを見るにつけ、富みと名声を得た中国人作家たちが今後どのような表現へと変化していくのか興味深い。



香港アートフェアの会場風景

（2008年5月17日／撮影田原）

かつて中国に住んでいたころ、国の制度や人々の価値観、人間関係など、日本とのあまりの違いに驚き、とまどった。中国共産党の下、市場経済で豊かになる一方、日本社会とは比較できないほどの格差社会、情報・言論の統制、表現の自由においてはまだまだ多くの制約がある。このさまざまな矛盾を抱えた複雑な国、社会にあっては芸術表現のネタは尽きない。というより、表現者にとってみれば描かずにはおれない切実な思い、表現であると推測される。その社会矛盾や不自由さによって得たトピックは中国現代アートの代名詞であった。しかし今やその視点は過去・現在から解き放たれ、未来へ向かいつつあると今回のフェアを見て感じた。いずれにせよ、中国現代アートが今後益々注目を集めることになるだろう。

（たはら みの／画廊スタッフ）